

校長室だより

共学共高

第
10
号

令和3年9月6日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

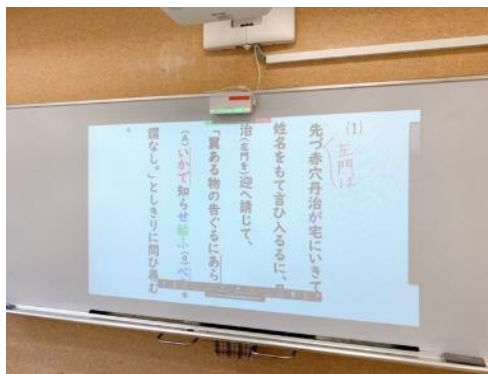
通常時間割に基づく同時双方向型の 全校オンライン授業

東京都では緊急事態宣言下で第二学期始業式を迎えることとなった。本校でも、9月1日の始業式には全校生徒に登校してもらい、オンラインでの始業式を実施した。8月に入ってから、都内の、いや全国の新型コロナウイルス感染症の急激な拡大は、これまでと全く異なったフェーズ（段階）に入ったと実感している。それゆえ、本校では夏季休業日中に全教職員・保護者・生徒に対して、9月2日から9月13日までの全校オンライン授業実施の可能性について、連絡をしてきた。同時に本校の校務分掌の一つである「教育研究部」の先生たちには、その準備を進めてきてもらった。具体的には第一学期に作成した「生徒用マニュアル」と「教員用マニュアル」の改訂や、各教室用のLANケーブルを用意するなどが該当する。教員用端末も第一学期に1日だけオンライン授業を試行したときには、教室に据え置きであったが、先生たちが考えて、今回は各自で端末を教室に持参して授業に臨んでもらう方式に変更した。また、学習をつかさどる校務分掌である「教務部」も、人事異動に伴う時間割の改訂を進めてくれた。さらに、オンライン授業となれば、用意する教材も異なってくる。9月1日に生徒たちに配布するための教材を作成・印刷するなど、短期間であわただしく準備した先生たちも少なくないはずだ。

9月2日から予定通りにZoomを用いた通常時間割に基づく同時双方向型の全校オンライン授業がスタートした。十分な事前研修の時間をとることもままならない、特に非常勤講師の先生たちには専任の先生たちとの協力体制の下、ぶっつけ本番でオンライン授業に臨んでもらわなければならない現実があった。実際に、こちらの音声聞こえない等のミスはあったものの、校内を巡回してみている限り、大きな問題は生じていない。オンライン授業初日には、教育研究部の先生たちやICT支援の教職員が、校内を巡回して授業実施に問題がないか、一つ一つの教室を確認して、必要なサポートをしていた。私も昨年度に前任校において2年生8クラスでオンライン授業を担当した経験、特に数多くの失敗をしているので、数名の先生のサポートをすることができた。

先生たちの心の中は見えないが、不平不満をこぼすことなく、プライドを持ってオンライン授業に取り組んでくれている。K先生の古典の授業をのぞいたところ、新たな発見をする

ことができた。オンライン授業では「画面共有」という操作を通して、パソコン内の教材を先生と参加生徒全員とで共有できる機能がある。ところが、本校の全教室に設置されている「電子ボード」も画面共有することができるのだ。K先生に指名された生徒Iさんは、マイクミュートを解除して、自分で考えた訳を発表していた。K先生は、それを受け止めながら、電子ボードに映し出された本文に、マウスモードに設定した電子ペンで書き込みをして、読解を進めていた。これは私も知らなかった機能であった。きっと他教科の先生たちも活用したいと考えるのではないだろうか。



今は授業配信することで、生徒たちの学びを止めることなく保障することが大切である。先生たちがやがて慣れてきたら、ブレイクアウトルームを使って、小グループやペアでの対話をさせ、それを表現させる、あるいはチャット機能を使って質問を受け付けてやり取りをするといったことも当たり前になってくるだろう。私としては対面での授業が一番よい、と考えている。しかしながら、デルタ株に置き換わってからの危機感は大きい。生徒たちの安全を確保しながら、どのように教育活動を進めるか、悩みも大きい。今後も状況に応じて、さまざまな判断をしていくことになるだろう。さまざまな批判も受けることになるかも知れない。

それでも、先生たちが毎日、授業配信して生徒たちとつながってくれていることをありがたく感じている。オンラインではあっても、「授業」という学校における最大の営みを継続してくれていることを嬉しく思う。生徒たちのいない学校は、寂しい。廊下を歩いていても、生徒たちの姿はなく、先生の声が耳に届く。不思議な感覚である。対面授業に戻って生徒たちに会ったら、オンライン授業の感想なども聞いてみたい。きっとあの生徒たちは、自分たちから校長室にやってくるだろうな、と今から想像している。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)